

平成30年3月1日(木)
生徒会誌「白玲瓏」(全日制)

秋田県立本荘高等学校 校長 今井 智幸

最後は、人生の扉は自分の力で

4年に1度の雪と氷の祭典第23回冬季オリンピック競技平昌大会が、2月9日の開会式で開幕した。日本選手は、海外開催の冬季五輪では最多となる124選手(男子52人、女子72人)が参加している。その内、十代の選手は15人(男子6人、女子9人)、メダル争いに絡みそうな選手から、次代を担う有望株まで、多彩な顔が並び、その活躍が期待されている。スノーボードのハーフパイプ、スロープスタイルやショートトラックスピードスケート、フィギュアスケートには、高校生の選手も参加している。世界のトップアスリートとの戦いは、十代の若い選手たちに何を残してくれるのだろうか。

最近、十代の若者の活躍が目覚ましい。

将棋の史上最年少棋士で、デビュー戦以来29連勝を達成し日本中を沸かせた中学3年生の藤井聡太は、一年足らずで五段への昇段も果たした。原稿を書いている今(平成30年2月11日)、中学生初の公式棋戦での優勝が話題になっている。新聞社主催の将棋の棋戦で、藤井五段はベスト4に進出、準決勝の相手は、史上初の永世七冠を成し遂げた羽生善治二冠。優勝すれば、中学生初の六段昇段となる。

全日本卓球選手権大会では、中学2年生で十四歳の張本智和が、十回目の優勝を目指す、オリンピックシングルスで日本人初のメダルリスト水谷隼選手を4-2で破り、王者に輝いた。この大会で、女子ダブルス、混合ダブルス、シングルスと3冠を達成した伊藤美誠は、十七歳で高校2年である。

伊藤美誠、自らこじ開けた3冠の扉 全日本卓球女子単

伊藤美誠の襟元に光る鍵型のネックレスには、こんな意味が込められている。「扉は自分の力で開けなさい」。不調に陥っていた昨春の世界選手権の前、母の美乃りさんからもらった。

同学年の平野美宇との決勝。自ら3冠の扉を開いた。第1ゲームは5-7から6連続得点で奪取。第2ゲーム以降は腰を落として球を押し込むようにフォアを打つ必殺技「みまパンチ」の連打もさえた。優勝を決め「死にものぐるいで勝ちにいった」と振り返った。

5回戦で敗れた昨年の大会後、世界で快進撃を続けた平野とは対照的に壁にぶち当たった。ふらふらになるまで球を打って地道にフットワークを鍛え、大振りの傾向があったフォアのフォームを修正。昨秋は中国にも武者修行した。今大会は中盤から足に痛みが出たが、最後まで動けたのは練習のたまものだった。

団体で銅メダルに輝いたリオデジャネイロ五輪後、心にすきがあった。それをライバルの平野が気付かせてくれたという。「感謝したい」。2年半後の東京五輪に向け、ライバルの物語は続く。
(朝日新聞デジタル1月21日)

どんな一流と言われる選手でも、ライバルや超一流、天才と争い、うまくいかない時がある。スポーツの世界で、常に勝ち続けるのは極めて難しい。そのつらい体験から、自己の課題に向き合い、トレーニングや練習の在り方を一から見直し、最高の工夫と努力を続ける。自己の可能性を信じて挑戦し続け、選手として成長しなければならない。スポーツをやる以上、立ち直りを学び、可能性に挑戦せざるを得ないのだ。そして、その競技の面白さと難しさ、奥深さを知るのであろう。だからこそ、いざという時、一人でも立ち向かえる冷静さや、メンタルタフネスも鍛えられる。母の言葉「扉は自分の力で開けなさい」という言葉を糧に、今回3冠を達成した伊藤美誠選手の活躍には、そんなことを考えさせられる。

冬季オリンピック競技平昌大会に出場した十代の若い選手たちは、これからのグローバル時代で、最前線で生きるということの象徴である。今回、一緒に出場した尊敬すべき多くの先輩アスリートのように、これからも一流選手としての姿をきっと見せてくれるに違いない。最後は、自分の人生の扉は、自分の力で開けなければならない。そんな若きアスリートに、大会の勝敗を超えて拍手を送りたい。